

第18回「東書教育賞」の審査を終えて

東書教育賞審査委員会

〔A部門〕

第18回「東書教育賞」を受賞された先生方、おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

東書教育賞も18回を迎えまして、年を追って応募される方々も増えてまいりました。先程紹介がございましたように、応募総数は237点で、これまでの最高でございました。それだけにレベルの高いものが多く、内容において伯仲するものがあり、それらの審査にもまた難しいものがありました。

今回の課題は「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」となっております。これはこのところ続けている課題でございますが、小学校、中学校を通じまして基本となる大切な課題であり、私どもは、創意工夫を生かした実践が具体的に記述された論文が集まることを期待したわけでございます。

審査の基準としましては次の3点があげられます。

- (1) 実践の結果に基づいて子どもの姿が具体的に記述され、論じられているか。つまり実践性の観点を重視いたしております。
- (2) 実践のなかにどのような創意工夫が見られるかという創意性の観点です。
- (3) 特殊な実践でなく、だれにでも応用できるような一般化への手がかりがあるか。また、子どもの発達段階や適時性への配慮が十分なされているか。これは一般性ということばで表せます。

その他、論文としての体裁が整っているかとか、オリジナルなものであるかなどの点も審査させていただきました。

今回の応募論文を読ませていただきまして、各地の先生方が熱意をもって新しい試みに挑戦されていることがよく分かります。先

生方の日常の教育活動に対するご熱心さと情熱に打たれ、いかにご苦勞が多いかが察せられると同時に、審査におきまして意見の対立する場面もあり、優劣のつけがたい力作を審査することの難しさを痛感いたしました次第でございます。

それでは、A部門（教科指導や学校経営に関する実践部門）について発表いたします。審査の結果、小学校の部で最優秀賞1点、優秀賞3点、奨励賞4点の計8点を、また中学校の部では最優秀賞1点、優秀賞1点と奨励賞3点の計5点を選定いたしました。

小学校の部の最優秀賞は、三重大学教育学部附属小学校の中浦基之先生の「考えることを楽しむ算数の授業」であります。この実践は、小学校2年生の算数の学習で、九九の計算をひととおり子どもたちが勉強したあと、掛け算を実際の場面で使ってみることを主題としています。

学習素材として毎日給食で扱っている牛乳パックを運ぶケース、そのケースに入っているいくつかの牛乳パックの数を勘定することが主たる学習活動ですが、数える仕方を子どもたちに考えさせるのです。子どもたちは実にさまざまな計算方法を考え出します。並べて数えるものとか、全体から引くもの、移動させるものなどさまざまです。その時に学習したばかりの掛け算を使ってみるとどうなるか。これも縦に分割したり横割りにしたりいろいろな考えが出てきます。それらはやり方によっていくつかのパターンに分かれることに気づいていく。個数計算から面積の計算に発展していく。単純な九九を覚えることから、掛け算を使うにしても求め方はひとつでないことを実際の場面で体感していくことによって、算数の楽しさに引き込まれていくのです。

この実践では、先生が子どもの発想をそれぞれ大切に、ひとりひとりの発想を他の子どもにも分からせて、自分の方法と比べさせ、どれが有効かを比較検討させることもされています。その過程で算数的な考えが育っていくようですがよく分かります。今日とりわけ求められる自ら考える力を育てる教育を小学校2年生の段階から実践していく優れた内容のもので、創意工夫と一般性の面でも秀でているといえます。

優秀賞には次の3点が選ばれました。

まず1点は、愛知県西尾市立花ノ木小学校上田富喜子先生を代表とした同校研究グループの「いきいきと英語に慣れ親しむ子をめざして」です。これは副題にもございますように「学級担任にもできる楽しい英語の授業10のポイント」を実践的に明らかにされたものです。小学校での英語学習が総合的な学習の中で各地で取り組まれ、またいかに取り組むべきかが論議されておりますが、そこでの問題のひとつに教師自体の未経験、力不足ということがございます。この実践は英語教育の専門でも何でもない学級担任が効果的な指導をしていくにはどのような方法がよいのか、そのポイントとなる学習活動いわばノウハウを開発したものです。花ノ木小学校の9人の先生が平成8年から6年がかりで実践研究した結果見いだした指導のポイントを10の項目にまとめたものです。年問題材とか基本語彙表とかは当然ですが、授業の形態、教材作り、ゲームやスキット、会話実習そして単元開発等のそれぞれについて実践を重ねて、子どもの反応や変容を見ながらポイントはここであるということ突き止めていくのです。この報告でとくに注目されますのは、先生方が力を合わせ協力して授業を開発していている点で、なかなか見られない姿が印象づけられました。だれでもが応用できるように、授業の実際の進め方を、目標に合わせて類型化している。そうした着想や指導の工夫改善に努

力が認められます。

2点めは宮城県仙台市立松陵西小学校の三浦和美先生の「学ぶ意欲を育む社会科授業の創造——郷土を開く『品井沼の干拓』——」です。これは社会科のいわゆる開発単元の実践です。開発単元は子どもたちの興味や関心は呼び起こせても、学習意欲の持続が難しく、追究型の学習が出来にくいと言われます。「そうだったのか」という勉強で終わるということです。この実践ではその面を改善するためにさまざまな活動を用意されて、個々の児童の追究を可能にしたすぐれたものです。副読本やワークシートの作成などはもちろんのこと、実際の干拓地の様子や資料館の見学、さらには多彩な発表会活動などもあります。先生はきめこまかな計画をたてられて、見学や発表を除いて15時間程度で4年生全体を指導しておられます。たとえば導入にしても、実際に台風があって豪雨で川の水があふれることがおこったのをきっかけとして捕らえ、大雨が降れば必ず品井沼があふれた昔を思い起こさせて沼を水田に変えた開発の歴史を調べようということを動機づけとしています。資料館の見学も見学とレポートで終わらせず、実際に昔使われたサイフォンの模型を作って水を流してみることまでしています。このように展開の工夫によって教師主導の展開の良い点と生徒主体の活動とをうまく組み合わせ、生き生きとした学習を成り立たせており、感心する次第です。

優秀賞のもう1点は、群馬県富岡市立西中学校の八高文代先生の「算数を学ぶよさを味わえる指導の工夫」であります。これは先生も述べられているように、算数の学習に対して児童の様子を見ると、どうしても「算数は出された問題を解く勉強」とか「答えさえ分かれば勉強は終わり」という意識が抜けられない実態がある。その原因としてたしかに問題を与えて解かせるだけの授業が多いことありますが、先生は実生活と関わりのある問題を

自ら解決する体験の少ないことに着目され、自分たちの身のまわりから学習に関係する事象を探し出し、数学の知識や方法を使って考えてみる活動を、繰り返し学習過程に取り入れてみたものです。

論文では6年生の比例の学習での実践が報告されていますが、先生は1年生から6年生まで各学年についてこうした学習を系統的に取り入れられており、その評価規準を含めた全体の構想や理論的な考察もたいへん綿密なものであることがわかる内容になっております。

ちなみに、今回の応募論文のなかで非常に特徴的なことは、子どもの自己評価や相互評価がけっこう使われるようになってきていることです。

以上、A部門で最優秀および優秀賞を得られました実践論文でございますが、東書教育賞には、このほか、奨励賞または入選とされた論文がございます。いずれの論文を拝見しましても、今、現場の先生方が子どもたちにいかにしてしっかりとした基礎基本の学力を身につけさせるかにご苦心されているか、また、いろいろと新しい手法、技法を創意工夫をいただいているかということが、はっきりと読み取ることができまして、それが大きな成果ではないかと感じた次第でございます。

最後に2点ほど感想を追加させていただきます。一つは、今回のテーマである「生き生きと学ぶ」ことの、生き生きと学ぶ方法、しかたを子どもたちに身につけさせることが非常に大事なことなのですが、これは小中高校だけの問題ではございません。私も長い間大学の教員をいたしておりますが、大学生たちにまさにそういうことが必要になってきております。大学に入ってきてこれから4年間「さあ、遊ぶぞ」という意欲は持っています

が、「さあ、勉強しよう」という意欲を持っている学生は少ないようです。仮に大学がレストランだとしますと、まずお客さんを入れてはいけません。ともかく我が大学に、減ってきているお客を必死になって呼び込みます。来てくれるのはよいのですが、そのお客さんたちはおなが空いていません。全然食欲のないお客さんを迎えたレストランのシェフみたいなものが私たち教員です。これは非常に深刻なことなのですが、今の学生はどこかで勉強は面白くない、生き生きとするものではないという気持ちがあるようです。そこをどうするかという問題に直面しておりますが、それなりの努力はしておりますが、なかなか足りません。そういう立場から先生方の報告を読ませていただきまして、かえって勉強になりました。

第二点は、先生が自分の授業を事細かに、正確に記録するという習慣をもっているのは日本だけではなくるかと思いますが、先生が授業記録や実践記録をつくるというカルチャーは果してアメリカなんかにあるだろうか、アメリカの小学校の先生の授業記録というものが、ふだんこれだけたくさん書かれているようなことはあまりないのではないかと思います。これは日本の教員文化の非常な宝ではないでしょうか。自分の実践の姿を書き留めるのは他の職業分野でもあまりないことではないでしょうか。これからも、この大事な教員の文化を受け継いでいただきたいと思っております。

(寺崎昌男)

〔B部門（情報通信メディア活用部門）〕

第18回東書教育賞にご入賞の皆様にご心よりお祝い申し上げます。

B部門は、このところ応募点数では横ばいではございますが、それだけに質的な面では大変高くなってきているように感じております。

この部門は、とくに情報通信メディアの特性を生かして学習指導等の活性化を図る実践上の工夫、また情報通信メディア利用教育の輪を広げる研究と実践を課題としておろしまして、審査の観点としましてはA部門の観点に加えまして、情報通信メディアの利点・長所を十分に生かし、学習指導等のなかで適切に活用されているか、という点から拝見させていただきます。

新しい教育課程が始められまして、軌道にのってきている現在ですが、その中で情報通信メディアを教科の指導の効果をあげるために使うこととともに、新しい総合的な学習において大変大きな利用価値のあることが広く認識され、活用が進められています。そういう状況を反映しまして、応募論文の中にはメディアを統合的に組み合わせて使っている例がたくさん出てまいりました。従来ですと、コンピュータを単体として使う、あるいはインターネットだけを使うといった例が多かったのですが、いろいろな情報通信メディアを組み合わせて使われるというのが特徴的になってきております。

審査の結果、最優秀賞1編、優秀賞1編、審査員特別賞を1編、それに奨励賞1編を選定いたしました。

最優秀賞には、徳島県情報処理教育センターの野村篤先生の「学びを支えるデジタル機器活用——体育科「とびばこ運動」での実践」が選ばれました。長い間体育の時間にとびばこ運動を伝えてきて、どうも効果が今ひとつあがらないことから機器の活用を工夫された

もので、授業のトータルなシステムとして完成度の高いものに仕上がっています。授業に3つの場を設定されています。まず、自分の跳び方がどういう状態のものかを確認する場、つぎに、もっと良く跳ぶコツはなにかを研究する研究の場、それから練習の場です。それぞれの場で機器が使われます。例えば、確認の場ではとびばこを跳ぶところを時差再生するのです。跳んだ10秒後にコンピュータで見られる。この時差再生利用は従来からテレビビデオの鏡利用で一般的なものです。前回の東書教育賞で最優秀賞になったつくば市の吉田先生の論文も国語の朗読ですばらしい実践を同様の手法でされていますように先例があります。けれども体育でトータルなシステムとして上手に組み立てられている点が特色です。姿勢とか手をつく位置とか踏み切りのタイミングとか、そうしたことが自分がいま跳んで10秒後に再生されて分かるのです。

研究の場では模範的な跳び方の演技をフラッシュアニメで表示して、子どもが見て、自分のと比べて上手な跳び方を研究するのです。一方では自分の跳び方の映像もたまっていきますからどこが良くないのか分かります。この後は練習の場で、繰り返し練習する。このときTTで先生が個別に指導しますが、マシンも個別に対応している、つまり生きた先生の指導と、機械による指導とをうまく組み合わせていて、授業としてトータルなシステムを形成されている点が高く評価されます。もうひとつの特色は、自分のデータばかりでなく他の子どものデータも見ることができます。「とびばこ劇場」と名付けて映像集を作ったりされています。さらに授業が終わりますと、映像に子どもの感想文や日記を加えてデジタルポートフォリオとしてCD-Rに記録して、それを家庭に配りますと、保護者は子どもの成長、勉強の伸びがよく分かります。また、模範演技を収録して「器械体操図鑑」を編集して市内の小学校に配布するなど、幅広い実

践です。このようにシステムと先生との役割分担がよく考えられていて、子どもの伸びが先生にも良く分かります。また、機械にまかせておいてもよい子どもには機械にまかせ、先生の指導が必要な子どもに集中して指導することができます。これが最優秀賞の実践でございます。

優秀賞は茨城県水戸市立国田小学校の益子佐絵香先生の「効果的な言葉で表現するための、テレビ番組と合成写真の利用」でございます。

これは国語の表現力の育成をねらいとしています。インターネットやコンピュータというのではなく、テレビやデジタルカメラという従来型メディアが利用されている点が重要なところですね。テレビの映像を見てその感想を上手に表現するにはどうすればよいかということがテーマです。素材として料理番組を取り上げています。美味しそうな料理をまず静止画で見せる。その美味しさを言葉で表現してみようということから始まります。つぎにテレビでシェフが料理の説明をしている番組を見せ、はじめは音無しで、あとで音ありで見せ、それを比較しながら子どもが説明文を考えるのです。その表現のしかたが、参考に見るメディアの種類によってどう違ってくるか、それを実際に比較しながら研究されているという大変ユニークなものです。そして合成写真を使って子どもがそれぞれ美味しさの説明書を作っていきます。静止画を見て説明するのでは見た目の印象を表現しているのですが、テレビの音無し画像では目ではなくて歯とか口とか鼻に関わる表現、プリプリとか歯ごたえとか表現のしかたがスタティックなものから五感的なものに変わります。音声を入れるとさらに実感がともってきます。こうしてももの見方がメディアによってどう変わり、それを表現するにはどういう表現がふさわしいかまた上手かということが勉強できます。これはメディアリテラシーの教育の一つの良い実践であり創意性に富んだものと評

価いたしました。

つぎに審査員特別賞として茨城県つくば市立竹園東小学校の吉田浩先生の「ネットワークを活用した共同学習・協調学習の活性化をめざして」が選ばれました。吉田先生は実は昨年の東書教育賞で最優秀賞に選ばれていらして、今回も内容は優秀賞のレベルなのですが、そういうことで審査員特別賞とさせていただきます。これは、いろいろなメディアを活用されてネットワークを通した校内や校外の生徒たちとの交流に関する実践でございます。すでに3,000人とか100校とかの交流をされていて、今回は6年生の卒業研究で成果を交流するのですが、どうも子どもが自分のことの一方向的な説明になりがちで、フィードバックがなかなかできない。相互のやりとりを工夫して双方向のコミュニケーションを促進するにはどうしたらよいかを研究され、子どもの活動を改めていくのです。例えば簡単なことでは、同じメールでも題名の付け方で返信量がずっと違うことから、相手を考えたタイトルづけを工夫させる。また、ビデオメールで動画像を送ると先方も良く分かって効果的であるとか、インターネットでも生中継をすると相手もそれを受けながら自分も遠隔で参加することができる。テレビ会議も子ども自身が仕組みでやらせるというようにする。非常にユニークなのは無線LANです。携帯電話が普及していますので、例えば水の汚染について同時多地点で調査して、情報を交換するのです。ここのところを発展させると、これはこれでひとつまとまった実践になりますが、今回はいろいろなメディアを使って交流を促進するところに重点をおいたものになっています。今後モバイルなどを駆使してさらなる新しい活動が期待できます。

このようにいずれも子どもが生き生きと出てくるものが高く評価されます。全体を通して情報通信メディアがモバイルやテレビも含

めて、最先端のメディアと伝統的なメディアとの両方を上手に活用した実践が増え、機器を利用した教育の広がりを示すものと嬉しく思います。

さて、話は変わりますが、始めに申しましたように、B部門のほうは応募点数がそれほど伸びないという点ですが、中身は毎年新しいものが見られます。先端的なものがたくさんございます。どうもそういう最先端のシステムとか、新しい工夫をこらしたものでないと応募の対象にならないと思われているのではないかと、心配になります。A部門でもグラフ電卓とかインターネットとか使われている実践がございますが、これなどはB部門でもよろしいわけですし、これからはいろいろな場面で情報通信メディアが普通に使われていきます。その中でよい授業が成立するものがいくらかあると思います。先端的なものと同時に肩の力を抜いて、普通のメディアを上手に使う工夫が望まれています。

今後ともよい実践報告をたくさんお寄せいただきたいと思います。願うものでございます。

(坂元 昂)

各審査委員の講評、所感

[奥田真丈]

新しい指導要領が全面実施になりました初年度でございますが、たくさんの実践論文を拝見いたしまして、先生方が新指導要領のねらいをいかに達成するかに努力されていることを痛感いたしました。

私は「教育は実践あるのみ」ということを信条としております。今回の審査でも共通して申せることは、皆様が教育実践を非常に大切にされているということです。よく言われていますように、実践にはPDSが大切であります。Planをしっかり立てること、Dはプランに即したDoing実践です。そしてSはSee、つまり評価ですね。どの論文もこのPDSをいろいろな角度から創意工夫をこらして考えていらっしゃると思います。とくに今回は評価について関心を持っていらっしゃるがよく分かりました。そこで私は、このPDSにもうひとつ‘I’を加えたいのです。評価した結果を基に「改善=Improve」を図る。次の学習指導の実践を改善していくことを考えていただければ大変良いのではないかと思います。どうかこれで終わってしまうのではなく、さらに継続していただいて、その際に評価された結果を‘I’に生かしてくださるようお願いいたします。さらに他の先生方に皆さんの実践研究を広めていっていかれることを切に望みます。

[杉山吉茂]

算数・数学教育に関わっている者として今回は大変嬉しいことに小中学校の最優秀賞を始め、優秀賞や奨励賞にも算数・数学の実践が選ばれました。長い間審査に携わっていますが、前回の奨励賞に数学が1つ入ったくらいで、今回のようなことはございませんでした。算数・数学分野の力を示していただいて嬉しく思います。ここのところ3割削減とか学力調査の結果とかでがっかりしているようですが、最近の算数・数学の研究会などを見

ますと非常に活力があります。全国大会では3,000人以上、7つの地区大会でも1,000人、小学校だけの大会でも1,000人以上とか昨年末のセミナーでも300人もの先生方がお集まりで、算数・数学を研究する態勢が出てきております。これからいろいろと研究実践が行われて算数・数学の学力の向上が図られるでしょうが、今回の教育賞の結果もそれを後押しする良いきっかけになるものと思います。

もう一つ嬉しいことは、川上先生のグラフ電卓を利用された実践が最優秀賞に選ばれたことです。グラフ電卓と言うと、なにかグラフが描ける電卓という程度のものと思われがちですが、実は文字式の計算、微分積分もできますし、関数も全てできます。数学のソフトが入った電卓と思ったほうがよいものです。このグラフ電卓なるものは日本ではあまり使われていないのですが、世界の数学教育の傾向はこのグラフ電卓を使った数学教育です。10年ほど前にアメリカに行きましたとき、すでにそのことをつぶさに見ることができました。その後、理振法の委員をしていたときに高校には48台を7セットくらいは入れられるように措置だけはしていただいたのですが、あまり採用されておられません。世界と日本の場合となぜ違うかと申しますと、数学教育の傾向が違っているのです。日本では入学試験が目前にあって、試験に合格するために「分かる」「できる」ことに重点を置く教育をしています。どちらかというに分からなくてもいいからできれば良いという教育になっております。一方、アメリカでは勿論、世界的には数学教育は数学を見つける、数学を使うところに重点が置かれています。数学を使える人間をつくる、そのためにグラフ電卓のようなものを盛んに利用するのです。そこで何が恐いかというと、数学のソフトですから数学者が使うような数学が使えるのです。ですから数学の中身が、日本ですと手で計算できる程度に過ぎないレベルがずっと高いものにな

ります。微分でもなんでも解ける、それを使って日常的な問題なども解決しようとする。数学を使って事象を分析して問題を解決する、そういう人材を育てようとしています。産業界にもそうした若い人たちが入ってきます。そうした国と、入学試験にだけ受ければよいのだという国との差がこれから出てくることを憂えるものです。そういう意味で川上先生の実践は、グラフ電卓を使うような数学を世間の人に認知してもらう上でも良いきっかけになるものと思います。

〔高桑康雄〕

論文を拝見しまして、先生方が教育ということに非常に大事にされて実践をなさっているその気持ちがよく伝わりました。私はかねてから視聴覚教育に関わって参りましたので、メディアということに関心があるのですが、先生方がどうしたら子どもを近づけ、意欲を高めることができるか、いろいろと苦心されていて、そのためにさまざまな道具を工夫されていることに感心いたしております。道具にもいろいろありまして、例えば見学というものも教えるひとつの道具になりますし、あるいは地域そのものが道具になるようにも思えます。高度な機械的道具だけではなくて教える手段をどうすればよいか、そういうことを考えていく上でいずれの論文も優れたものでした。例えば小学校の部の最優秀賞の中浦先生の場合は、大変身近なところで牛乳パックを道具に使っておられます。どんなものを使ったら子どもの学習に役立つかを工夫する、これは子どもにとって大事なことです。そのことがよく分かりました。

視聴覚教材に関してひとつ気掛かりなことは、映画やビデオ、放送番組などを使うとき、今のままでは著作権の問題をクリアすることが難しいことです。教育に使うといってもクレームをつけられますと権利侵害の問題が生じます。とくに放送番組を編集し直して使っ

たりすることはかなりシビアです。一方では授業を良くしようとするのですが、他方で権利社会の中で注意をしなければならない。今、関係団体の間でいろんな論議がなされていますが、なかなか簡単には参りません。

こうしたこともございますが、今後ともご工夫をなさって優れた教育のための道具を開発されて、研鑽を積まれますよう期待申し上げます。

〔多湖 輝〕

東書教育賞も今回で18年を経ましてその間ずいぶん大きな時代の変化があったわけですし、同じ審査員でいいのかなと思っている次第です。今回は算数・数学が圧勝でして、もうちょっと他の分野のほうも頑張っていたきたいと思うくらいです。いま社会には複雑な問題が多数あります。国際問題なども本当に複雑で込み入っております。イラクや北朝鮮の問題などもそうです。子どもたちはそうした中で生きているのですからそうした現実の問題に近いようなところでの良い実践をしていただけたらなという気もいたします。

文科省などももう少しゆったりした建物、環境にしませんとだめですね。それでないと国の教育の基本方針を考えることはできないでしょう。本に埋まってやっておられて気の毒に思います。そういう意味で教育というものをもっと大事に考えてみないと大変なことになります。北朝鮮での反米教育などが報道されますが、アメリカがいかに残虐であるかなどということを子どもに教えこんでいます。反日的な教育もやっています。毎日そうした教育を受けていると半年か1年で思想的に根底から変わるでしょう。そういう大きな影響を持つものがいま周囲にはたくさんあります。例えば、明治以来日本では唱歌を熱心に教えていましたが、あまり音楽教育としては効果がなかった。ところがカラオケが流行ってきて誰もが皆のままで歌わざるを得なくなりま

すと、日本人の歌唱力のレベルは一気に向上しました。こうしたことを考えますと教育の力の本質的なものは何なのかということを考え直さなければなりません。

英語が小学校に入るようですが、これも沼津の加藤学園の例のように小学校から教科書も英語に直して、授業も英語でやっている。文科省も国語と社会以外はいいというようなことなのでそうしています。ここは帰国生徒も大勢いますので、中学生でも完全な英語を話すようになっていきます。英語が絶対必要だとなればやらなければならないわけです。

上海に行きました時のことですが、魯迅公園で上海の市民が日本語の勉強をしているのにつかりました。私たちを見かけるとすぐに駆け寄ってきて、日本人ですねということ、さあ皆で会話をしましょう、なんでも話しかけてみましょうと言う。こちらの迷惑なんか考えずに年寄りも子どももしゃべりかけてくるのです。英語と日本語とをこれからは勉強しないと中国の発展はないと確信していて、街中で勉強しているのです。必要があれば勉強していくというハングリー精神、エネルギーに接しますと、日本はうかうかしているとやられてしまうぞと思います。激動している今の体制に対して教育は相変わらずもたもたしている。政治もそうですが、長期にわたって教育界が頑張っていて、新しい時代にどういう人間をつくれればいいのか、真剣に皆で考えてつくっていかないとイケません。新しい社会に適應できる日本人をつくっていくことでしょうか。

そして新しい日本人のアイデンティティ、愛国心のようなものを持ってもらいたいです。これは自然な形で持てるのです。サッカーのワールドカップのときでも、君が代を歌わせるとほとんどの若者は立ち上がって自然に唱和しています。教育というのはそういうものでして、ある条件が整って周りが動いていくと自然にそういうものが出て参ります。生き

る力とか教育の根本とは何か、保護者も交えて、そこを徹底的に考えてみて、国づくり、教育をする。その基本は先生方の力だと思います。

〔赤堀侃司〕

メディア部門ですが、さきほど坂元先生のお話にもありましたように、こここのところ応募者数が増えていないことにちょっと悩んでおります。ある面ではこれは当然のこととも思えます。なぜかと言いますと、情報通信メディアは道具なのです。道具はあまり前面に出てこないほうがよいのです。だんだん透明になって、本質的なことをもっていただきたいと私は思っています。ですから本当の教育に役立つ道具だと割り切ってどんどん使われていくことが良いのです。しかし、最近では、この道具というものが意味を持ちはじめています。道具が人と人とを結び付けるようになったのです。この点に私たちは注目しています。先日、学会会議で高等教育におけるITの活用という話をしました。これは衛星通信を使って講義を送る。衛星ですからアジア各地に届きます。タイや上海の学生がいま受けています。会議に参加しておられたモンゴル工科大学の先生が見えまして、モンゴルでも受信できることを確認されて、帰ってからすぐに正式にモンゴルも受信受講契約をしたいと申し入れてきました。メディアは表に出ません。何を使ってもいいのですが、このモンゴルの例のように広い範囲で私たちを結んでくれます。そうなりますと別の能力が課せられてきます。例えば英語です。大学の講義は英語でやることになります。外国との垣根もなくなって参ります。いいものはいい、ということになります。

先生方の実践論文の中にも最優秀賞のたびばこの実践で、跳んだ姿がすぐに再生されて見られるのがありました。たったそれだけのことに過ぎないのですが、それがあること

によって子どもは何回も練習したくなったと書いています。子どもが生き生きと練習する、その子どもの顔を親がメールで見て「いい顔してる」と言われている。なるほどと思いました。メディアは表に出ないほうがよい、しかし裏方で良い教育をするために役立つものでなければならない。ICTは道具に徹して、人をつなぐ、ひろげていく、その原動力にならなくてはいけないと思います。これからもICT教育を広げていきたいと願います。

〔堀口秀嗣〕

B部門の審査を通じまして、日常化とか継続的使用とかいわれる状況が見えます。今回入賞の実践をとりましても体育、国語、共同学習、理科と教科の広がりも出てきました。2005年には普通教室にコンピュータがはいります。ICTをいつでも、どこでも、だれでも利用できる環境ができつつあります。先生方は多様な使い方を指向していただいて、一度失敗したからそれはだめだと結論づけないで、もっと工夫すればもっと良い成功が得られると信じてやっていただきたいと思います。

吉田先生の実践にもありましたように、使っていくうちに子どもがだんだん上手な使い方を会得していく、子どもが変化していくところにICTの活用のポイントがあるので、ぜひ継続的に使っていただきたいものです。

学力低下が問題になっていますが、昨年8月にIT活用推進会議があり、「ITで築く確かな学力」という答申が出ました。この中で、確かな学力の中には知識理解だけでなく、意欲、思考力、判断力、表現力、情報活用能力も学力に含める。しかしこれらの力はペーパーで測れないものです。今日、学力低下と言われているものは、ペーパーで測れるものであり、そうでない学力を測って、トータルとして子どもたちの学力がついてきていることを学校の先生方に立証していただきたい。そうしませんと授業時数が減って単に力が落

ちたという結論だけでものごとが進められていきかねず、寂しい気がします。そういう点でICTの活用効果は大いにあります。デジタルポートフォリオなども電子的な記録を継続的に蓄積する点で大変有効な手段です。つまり評価するためには記録をしなくてはならない。記録をとるために学習が妨げられては困りますから、学習しているなかで自然に記録として残り、それが活用されることによって評価が多面的になっていけば、学校側から学力は低下していないと主張していけるのではないかと期待しております。

岐阜大学の付属中学校で、学校と家庭の学習を分けるということ始めています。つまり家庭での学習が、宿題など学校の学習の補充に使われていたり、また家庭での勉強が学校でそのまま役立つような即時性ばかり考えられてきましたが、家庭でなければ築けないような学力をつくっていく工夫、それを学校がサポートする。本来家庭が工夫すればよいことではありますが、それを学校が助けるのです。家庭と学校との連携を補充的に考えるのではなく、家庭でないと育たない学力と学校でないとつくりえない学力とを上手く組み合わせで学力を向上させるのです。

2005年までには全ての先生が必要な場面でICTを使えるようにすることがEジャパン構想にも盛り込まれていますので、ぜひ学校内での活用とゆくゆくは家庭での活用にも広げていただけたら生きた教育の改革になっていくものと思います。

〔西村佐二〕

第18回東書教育賞の審査に関わらせていただいて感じたことを、小学校の部に限って申し上げます。まず、多くの中から入賞された実践論文だけあって、現在論議されている学力低下への不安や懸念を十分に払拭する価値ある優れた実践であることを心から喜び、先生方のご姿勢に敬意を表します。

とりわけ、どの実践記録も、目の前にいる子どもたちと誠実に向かい合い、一人一人の学びの意欲にしっかりと点火し、確実にそれぞれの能力を身につけさせている実践は、これからの学習指導の在り方について貴重な示唆を与えてくれます。

中浦先生の「考えることを楽しむ算数の授業」では、身近にある牛乳パックを学習素材に、操作活動を通し、友達との考えにかかわらせながら、考えることを楽しむ算数の授業を創り上げました。また、同じく「算数を学ぶよさを味わえる指導の工夫」の八高先生の実践でも、比例の学習で、実生活の中から伴って変わる2つの量を探し出し、それを実験や操作活動で調べ、学んだ力を使って身の周りの数量関係を考えるという実生活に関連した一連の学習活動を通して、算数を主体的に学び、学ぶよさを味わえる授業づくりを実践されています。さらに、三浦先生の社会科「郷土を開く『品井沼の干拓』」でも、台風で臨時休校した経験から、大雨が降ると沼が氾濫して困っていた品井沼の問題へとつなぎ、ワークシートを活用したり、品井沼の見学活動をするなどして、学ぶ意欲をはぐくむ社会科授業を創り上げています。

OECDのPISAの結果にもあるように、今日、学びの意欲の低下が大きな課題になっています。このようなとき、新学習指導要領の趣旨でもある自ら学び考える主体的な学び手をそだてることは喫緊の課題です。この課題に、今あげた実践事例は、見事にその答えを与えてくれているように思います。子どもたちが生き生きと学習を展開し、確実に力をつけているこれらの実践に共通していることは、子どもたちの身近な生活や意識にかかわるリアリティのある学習になっているからだと考えます。これからの教育実践で大切なことは、学習を子どもたちにとっていかにリアリティのあるものにするかであり、そのことが学ぶ意欲を持たせ、学ぶ喜びを感じさせることに

なるのだと考えます。

〔星 正雄〕

新しい時代を担う子どもたちの資質能力が様々な視点から取りざたされる中、本賞のもつ意義は大きい。中学校に絞ってコメントさせていただくと、最優秀賞の倉敷市立南中学校川上公一教諭の「実験・観察をとり入れた関数の学習—グラフ電卓を利用して」は学習とりわけ数学の有用性の課題に正面から取り組んだ秀作である。日本の子どもたちが数学や理科など今学ぶ教科を将来生かした仕事につなげたいと考えるかという問いに非常に多く「否」と答えている。教科の学習の有用性は学ぶ意欲や応用力に低触する重要な部分である。川上先生は、世界的なマラソンランナーの高橋選手の記録という身近な事象の分析を通し関数の摂理を引き込んでいる。

三浦市立三崎中学校の益田孝彦教諭の「理科教育を通した教育課程へのアプローチ」は、理科好きにさせようとする教師の情熱と生徒愛を感じさせるものである。絶対評価は諸刃の剣であり、指導の質が評価に即表れる。評価の在り方が教師の質を反映すると言ってもよい。益田教諭は、自分なりの緻密な観点を基に、規準づくりをし、さらに、多様な評価

方法を駆使し評価を行い生徒や保護者に知らせている。生徒や保護者からの意見や要望などのフィードバックも行い指導の改善をたえず図っている。選択理科における自由研究の成果もそうした必修授業における指導と評価の在り方が見事に生きた証左である。

奨励賞の3点、長野市立柳町中学校の徳武隆夫教諭の立志式を「総合的な学習の時間」として、「生き方」「自己を見つめる」等々を考えさせる実践、広島市立高美が丘中学校平賀正幸校長の学校経営実践、佐賀県嬉野中学校富永保教諭の国語の実践も、新教育課程の初年度を飾るにふさわしい研究実践であった。

平成14年度は、長年掛けて準備した新教育課程の出発の年であり、国民各層より成果が期待されている。多くの成果がある中、学力向上や絶対評価、かつ、「総合的な学習の時間」に対する評価は必ずしも高いものばかりではない。そうした中、本賞の各実践は全国中学校に大いに示唆を与えるものである。研究には教育の理念を探求する自らの情熱と手法が求められる。各中学校は、本賞から大いに学び、新教育課程の真価を求め、向上して欲しいと願う。(原稿)

